

アンケートにみる過去 10 年間の ピアス着用率の変化

「おしゃれ白書 1991～2000」より

過去 10 年で倍増
増えたのは 10 代 20 代の女性

2001 年 10 月 31 日

ポーク文化研究所
村澤博人/阿保真由美

はじめに

20年ほど前、日本では耳に飾るものといえば、イヤリング。バネまたはネジで耳たぶに留めて装着したが、バネが強くて耳たぶが痛く、外したり、あるいは留め方がゆるくて気が付かないあいだに落としてしまったりなどの経験をおもちの方はけっこういらっしゃるようだ。

そんな耳かざりが最近ピアスが当たり前のようにになっている。若い人の中では特にそうで、中学または高校生の娘と親とのピアスの装着の是非についての会話が話題にあったこともあった。

そこで、ポーラ文化研究所の「おしゃれ白書」より、ピアスの装着率の変化を探ってみることとした。

目的

「おしゃれ白書」におけるピアスの装着率の変化に関する調査データを集計分析する。

調査概要

「おしゃれ白書」は、ポーラ文化研究所が1979年以来継続している調査で3年毎に実施しているが、ピアスのデータを取りはじめたのが1991年であるため、その後の2000年までの4回(1991年、1994年、1997年、2000年)、10年間の変化を追うことになる。最新版の「おしゃれ白書2000」の概要は以下の通りとなる。それ以前とは調査対象者の人数がその時によって多少異なる程度で、大差はないと判断している。調査時期も毎回、5月から6月である。

調査地域：首都圏30キロ圏内

調査対象者：上記エリア内に居住する15歳から64歳までの女性、910人

サンプルデザイン(単位：人)

15～18歳(高校生)	70
19～23歳(学生)	70
19～23歳(社会人)	70
24～29歳(未婚)	70
24～29歳(既婚)	70
30～34歳(未婚)	70
30～34歳(既婚)	70
35～39歳	70
40～44歳	70
45～49歳	70
50～54歳	70
55～59歳	70
60～64歳	70

調査対象抽出法：エリアサンプリング法

調査方法：戸別訪問面接聴取法および留置法の併用

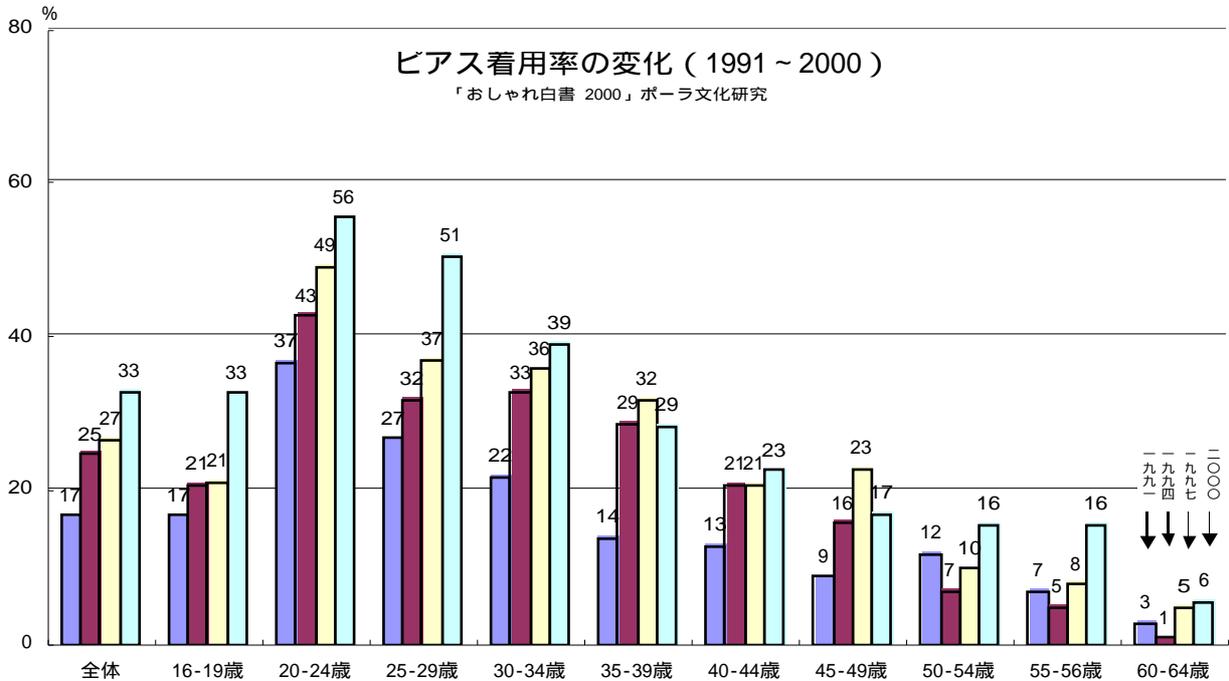
調査期間：2000年6月

調査結果

-1. 「ピアスをしていますか」について「イエス」と回答した人 毎回増加の傾向。

「ピアスをしている」人の率、いわゆる着用率を年代別に経年変化をみたのが、下のグラフである。

(1) グラフの一番左の棒グラフの変化(全体)をみると、1991年で17%にすぎなかった着用率が、1994年、1997年、2000年と毎回増えていることがわかる。

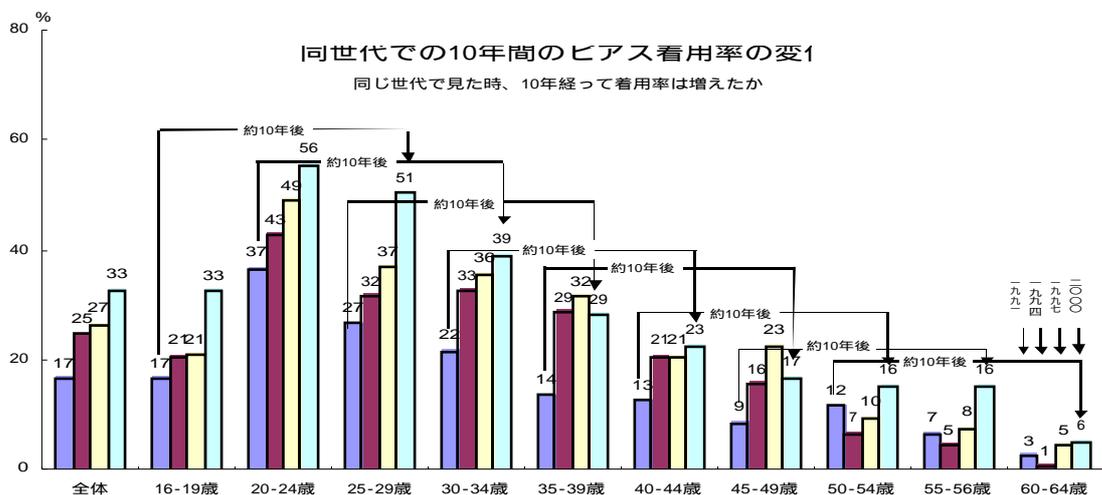


(2) 年代別にみると、「16-19歳」から「30-34歳」までは毎年増加している。「35-39歳」以上となると必ずしも毎回増加の右肩上がりではないが、1991年に比べて2000年は増加はしている。

(3) 各年代の着用率の割合をみると、1991年以来、「20-24歳」が常にトップで、2000年には56%と半数を越えている。次に高いのが「25-29歳」で、2000年にはかろうじて51%と半数を越えている。以下、「30-34歳」、「16-19歳」、「35-39歳」と続く。

「40-44歳」以上では、「55-59歳」までは2000年には15%以上の結果となるが、「60-64歳」では2000年で6%と、20人に1人程度となる。

(4) 約10年間の調査であるため、世代ごとの10年間の着用率の変化を見ることができる。たとえば1991年の調査では21歳の人、2000年では30歳となっているので、データも「20-24歳」から「30-34歳」の枠を見ることになる。そこで、1991年と2000年のデータの差を求めると、次ページの表のようになる。



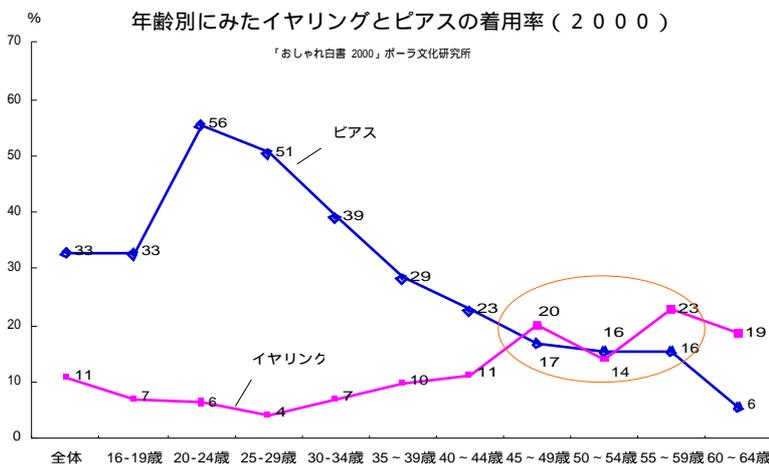
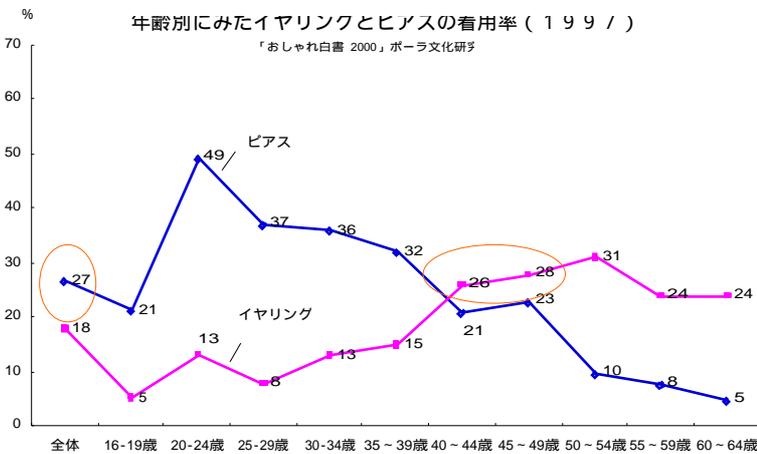
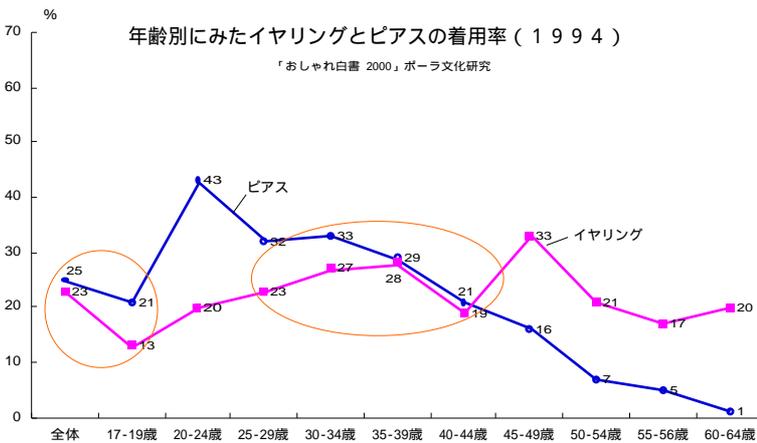
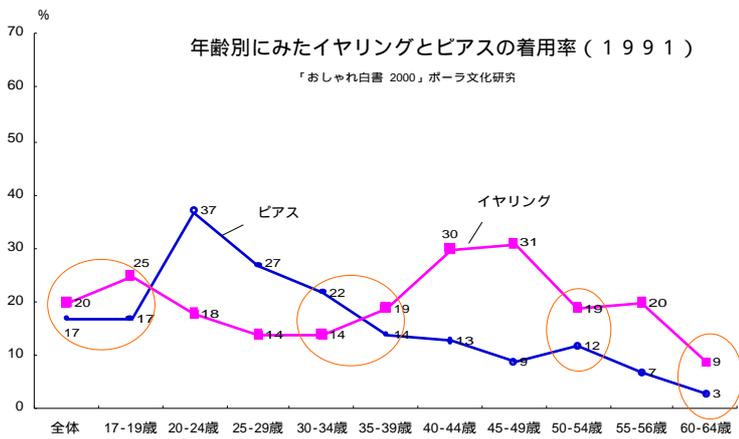


表1 世代ごとの10年後の着用率の変化

「16-19歳」	「25-29歳」	
17%	51%	+34
「20-24歳」	「30-34歳」	
37%	39%	+2
「25-29歳」	「35-39歳」	
27%	29%	+2
「30-34歳」	「40-44歳」	
22%	23%	+1
「35-39歳」	「45-49歳」	
14%	17%	+3
「40-44歳」	「50-54歳」	
13%	16%	+3
「45-49歳」	「55-59歳」	
9%	16%	+7
「50-54歳」	「60-64歳」	
12%	6%	-6

-2. 「年齢別にみたイヤリングとピアスの着用率の経年変化」 イヤリングからピアスへ

左のグラフ4点(グラフ中の 囲い の部分は10%未満の差。)をみると、「イヤリング」と「ピアス」の変化がよく見える。

1991年では全体でも「イヤリング」が多く、年齢別でも「16-19歳」と「35-39歳」以上で「イヤリング」が高かったのに比べ、年々、「イヤリング」の着用が高い層(10%以上の差)が高齢化し、2000年では「60-64歳」でのみ「イヤリング」が高い結果であった。

逆に、若い層ではピアスの着用率が圧倒的に増大していることがこのグラフからわかる。

考察

20代では半数を超える女性がピアスをおこなっている結果であった。

ピアスについては、耳に穴を開けることに対して、「親からもらった身体を傷つける」のはよくないとする意見をよく耳にする。しかし、調査の結果を見ると、もはや20代の女性にはこのような考えは通用しなくなっているといえよう。

前ページ右上の表1で示したように、過去10年の変化は、「16-19歳」から「25-29歳」への変化を除くと、若干のプラス程度の微増である。この微増の意味するところは、10年前にピアスをした人がその後も継続していたとすると、その年代で過去10年間の増加(=その間に新たにピアスをしはじめた人)はあまりなかったということの意味する。

いいかえると、2000年の時点で30歳以上の人でピアスをしている人は、そのほとんどが10年前に開始しており、調査しはじめての10年間には新たに耳に穴を開けた人はごくわずかであったという解釈が成り立つ。

一般的にいわれるおしゃれ観、すなわち「10代から20代にかけて形成され、その後はそれほど大きく変化しない」と一致するように見える。

今回の調査に置き換えると、ピアスの開始年齢は10代20代がほとんどで、彼女たちはピアスをしたまま中高年になっていくが、30代を過ぎてピアスを開始する人はあまりいない、となる。